

園長通信

イメージキャラクター

ふたぶう

高槻双葉幼稚園50周年を記念して誕生しました。幼稚園で子どもたちを見守っています！



2024, 06, 03

園長 岡部 祐輝

受け止められ広がっていく世界 イメージ

子どもたちの日々の遊びや生活を見ていると、それまでに経験したことや学んだこと、気づいたことなどを活かし、遊びや生活が広がっている姿がたくさんあります。例えば、4月下旬～5月初旬に、園庭のさくらんぼが実ったところ・・・



赤く実るさくらんぼのまわりから「ちゅんちゅん・・・」。。。。鳥がさくらんぼを狙っているのです。それに気づいた5歳児の子どもたちは、地面に落ちていた赤や緑色のさくらんぼを集め始めます。そのさくらんぼをひとまとまりにしたあと、看板を作り、ひたすらに下向けの矢印を描きます。「食べるならこちらを食べてね」ということを伝えようとしたのでしょうか・・・看板が出来あがりました。文字や表示に関心を持った結果、自分たちで「鳥に食べられないように」するための方法を模索していました。

「自分の興味関心が高いこと」や「やってみたい」、「不思議だから明らかにしたい」などのことには、積極的に知ろうとしたり、できるようになりたいという思いを持ったりします。このようなときに学び、気づきが、より一層深まります。そして子どもたちは、「きつとうまくいく!」、「これではどうだろう!」など、肯定的な思いを持ち、遊びや生活に取り組んでいます。

「うまくいったね」、「あなたの発見、とてもすごいね」、「よく考えたね」などその成果や過程・歩みを肯定的に、そして受容的に受け止めることで、「よし、また次チャレンジしてみよう」とする関心や意欲が高まります。よく、「ほめて伸ばす保育・子育て・・・」などが話題に出てきますが、肯定的な言葉がけを行うことを一般的に「ほめる」という言葉で指し示していると考えられます。

ともに立ち止まる/ともに考えるということ

一方で、「うまくいかないこと」、「落ち込んでしまったこと」など決して肯定的ではない感情に、遊びや生活の中でのなることもあります。このようなときも、受容的に接することは重要なことです。子どもの姿を見ていると、子どもなりの理屈・定義・概念が存在しているのではないかと思うことがあります。例えば、昔、このような場面を見かけました。大人からみると、きれいに積まれた積み木に見えましたが、どこか浮かぬ顔でいるある子ども。話を聞いてみると、最後の一個がどうしても乗らなかったそうです。その一個を乗せようと何度もチャレンジしますが、結果、すべて崩れてしまったのです。

このような場面で私たち大人はどのように言葉をかけるでしょうか？第一声として、「積み木は良く崩れるから、ま、そういうこともあるって！」と明るく励ますという考えもあるでしょう。「また作ろうね」と次の道筋を見せようとする考えもあるでしょう。言葉がけには唯一無二の言葉がけがあるわけではないですが、私たちが園で大切にしていることは、「受け止める」だけでなく、**加えて「切り返す」**ということを大切に考えています。

「～だったね」だけにとどまらず、「次は～をしてみたらどうかな?」、「～ちゃんのここまでの積み方とてもよかったから、次～したらできそうに思うけどなぁ」など、次の世界に広がることを伝えたり、これまでの経験を振り返りそれを活かせば、できる可能性があることを伝えたりすることで、「**子どもの主張を受け止める**」という一方通行的な関係から、**対話的な関係へと変化**します。

また一見して「いけない」という行為があった場合も、「子どもを受容的に・・・」と思われがちですが、「受け止めたうえで切り返す」ということ（例えば、「～を手に入れたかったんだね。でも次は～と言おうね」など）を丁寧に行っていくことが、特にこの幼児期では重要です。

ともに立ち止まり、ともに考え、次に進んでいく……。このようなときに「そばにいるからね」という感覚が高まるのではないかと考えます。



(参考資料)

・令和4年度 保育士研修 第3回加藤繁美保育ゼミ テーマ 「幼児中期の対話する保育実践」, 和光市保育センター発行, [3katouzemi.pdf \(wako.lg.jp\)](#)